

高崎能樹先生の生涯と

その教育活動(その二)

小林 公一

先月号に標題で(その一)を書きましたが、今月号はその続きです。すなわち、高崎能樹先生が残された多くの著作の中から手に入った主なものを年代順に追ってゆくこととします。

二、教育活動(続き)

「ヤコブ・エサウ」(一九三六年二月、基督教出版社)これは、基督教文庫『聖書物語』全二四巻中の第三巻として、高崎能樹先生がヤコブとエサウを分担して執筆されたものです。

童話集『鈴蘭の花』(一九四七年六月、子供の教養社)これには、「三つの人形」等二八の童話が収録されています。

高崎式基本算数用具『教図さいころの使い方』——幼稚園より小学校低学年まで——(一九四九年九月、日本工藝社)

この書物には、新しい算数教育、幼児の算数教育の原理、基本的な予備誘導、実際の誘導法——五までの数の取扱い方、

十までの数の取扱い方、十以上の数の取扱い方等——についてユニークな考え方が展開しています。その中で、幼児の数意識の発達は、直観物が身近に在ることと、それを取扱う「経験回数」が多いことによって著しくなることを立証しています、と説かれています。

算数の心理として、

(一)よく見る——よく考える——よく理解する——推理判断の推考力で理解を裏づける——更に想像力をも伸ばして興味づけること。(二)幼児は感覚的でありますから直観方便物の取扱い方に重点を置くこと。(イ)数図・絵・現物その他……視覚型 (ロ)拍手・足や口の音・その他……聴覚型 (ハ)持ち運ぶ品物・その他……筋覚型 (ニ)幼児は経験的であつて論理的でありませんから、日々の生活と遊びの中に算数生活の経験を豊富にさせること。といったようなことが述べられています。「金銭教育の仕方」にも触れています。良心的な算数生活を奨めるために、積

極的に金銭教育をせよと主張し、五歳からがその好期であるとされています。

『母心による教育』（一九五二年四月、草美社）

この書物は二百余頁の中に三八項述べられています。それぞれ傾聴に値する言葉が説得力をもって語られています。特に気付いたことを記しますと、先ず、女性は単に生理的な女性としてあるのではなく、母性の意識に立つものであり、神の代行者である使命を全うすべきであることが強調されています。

「女性より母性へ」「永遠の母」「神の代行者としての母」「母親の感化力」などの項がこれです。また「子どもの品性教育」を説き、「情操教育の効果」に触れ、情操教育は即ち宗教教育であるとして情操教育の大切なことを強調しています。「信仰教育の力」の項では、一五歳の中学二年生の男子——日曜学校の生徒——の実例が記され、腹膜炎の病苦に耐え、牧師から死の宣告をされたにも拘わらず心を騒がさず、臨終の床で、親、兄弟、親戚、知人、病院長、看護婦、女中にまで一人一人に謝辞を述べ、日曜学校の友達によろしくと言って、従容として瞑目したことが記されています。もって、信仰教育——特に回心期にある人間のそれ——が如何に大切であるかが述べられています。

『基督教幼稚園の在り方』——両親と先生方に語る——（一）

——（四）

これは、一九五三年頃のものと思われる。

この中で、人間の生命は「体生」「情生」「知生」「理生」「徳生」「美生」と「靈生」の七つに分析されるとし、人間の教育目的はこの七つの生命を充実させることにあります。すなわち、(1)からだを丈夫にさせる。(2)感情をうるわしくさせる。(3)豊富な知識をもたせる。(4)合理的生活になじませる。(5)倫理道徳を全うさせる。(6)高い文化を身につけてやる。(7)神と交る生活を徹底させるの七つです。

「教育基本法」には、人格の完成を目ざす教育とか、平和国家の建設に貢献し得る人物の養成とかが日本の教育目的であると示されているが、それが「文化教育」だけで出来ると考えたら大間違いで、宗教を無視した人本主義の文化教育では絶対に出来ません。それは「神本主義の教育」によるべきものであるとす。基督教主義の幼稚園は「靈育を本位」とすべきであると主張し、「神なき教育は知慧ある悪魔をつくる」といったオスカー・ワイルドの言を引用しています。

フレールは、人間教育の目的について、「我と周囲との関係交渉を通して、神と我との関係交渉を知らしめ、神と和ぐ生

活を営ましめるのが人間教育の目的である」と言っています。が、これこそ永遠不変の真理であるとしています。基督教幼稚園が何故フレーベル主義を尊敬するかというと、それは、人間教育の目的が有神論の根拠の上に立っているからであり、その崇拜対象が「完全な人格の実在の神」であるからであるとしています。

フレーベルは文化教育、道德教育、科学教育また健康教育を尊重しています。けれどもそれ等はすべて、目的ではなく、手段であって、窮極の目的は「神と和ぐ生活」に在りとしています。私共はこうした点に共感して、基督教幼稚園の在り方と致しますが、この尊い霊育を、三か年の幼稚園生活だけに打ち切らずに、教会学校の教育へと延長させてゆくことが大切であると主張しています。

基督教保育の実際を考える場合、幼児初期の被暗示性やそれと密接に結合している幼児の模倣性、就中大人のまねに心を致し、親や教師の示範の教育が最も大切であることを痛感いたします、とあります。幼児期の特質である「被暗示性」と「模倣性」と「想像性」とを中心に幼児を宗教的雰囲気の中に安住させ、生々とした宗教情操の芽ばえを育て、キリストに対する愛慕の情を湧き立たせることの必要性を説いています。

幼児の信仰教育を考える場合、新約聖書エペソ人への手紙第六章四節に記されている「父たる者よ。子どもをおこらせないで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい」が基督教教育の真髓であり、私共の智慧や感情を本位として子どもをしつけるのでなく、基督の教え給うた教えに従って教えたり、しつたりすることが基督教教育の本道であります、と主張しています。

基督教幼稚園における保育作業の重点は、礼拝生活の訓練、祈りの生活の訓練、讚美の生活訓練等を通して、神と交わる生活訓練をすることが教師の任務であることを強調しています。基督教幼稚園における「信仰教育」は、宗教情操の教養を土台として、それを実際のな信仰生活の形態に導きあげてゆくことであるとして、全体の基礎である「宗教情操の涵養」について、次のように述べています。

(1) 畏れの心を養え。これを徹底するためには、指導者が先ず敬虔な態度で神に祈り、神の聖旨に従うことを第一として見せねばなりません。幼児は指導者の宗教感情と宗教的行為とに従って、それに同化したします。

(2) 憧れの心を養え。子どもたちはキリストを知ると、「キリストのようになりたい」という憧れのために、その理想我は常

にキリストを見上げます。そしてそれと同時に現実に立ちかえると、不完全きわまる自分がよくわかって、遂に「罪に捕われている自分」を自覚するに至るのであります。このキリストは憧れの的であるばかりでなく、捕われている自分を救い聖めて下さる救い主であることが信じられるのであります。

(3) 感謝の心を養え。感謝の心と「その恩に応える態度」とを神とキリストに向けさせるように誘導することが大切であります。

(4) 信頼の心を養え。神とキリストを信頼し、隣人をも信頼して仲好く協力する。そのためには、両親や先生がその模範を示せばそれで結構であります。

(5) 善意の心を養え。神から万物を見ると呪うべきものは一つもありません。神の支配下にあるようになると、どんなに醜悪に見えるものでも、真となり善となり美となつてまいります。

特にキリストの福音はどんな罪人をも聖化してまいります。このキリストの恩恵を信ずると、誰に対しても善意心が持て、祝福心が持てます。幼児に善意心を育てるには、指導者の感化が第一で、何事をも善意に解釈する特徴のある先生であり、父母であればその通りに同化してまいります。

右のように、「敬虔即ち畏れの心」と「高きを憧れる憧憬心」

と「感謝報恩の心」と「信頼したり信頼されたりする心」と「善意をのみもつ心」とを幼い時から養いますと、神を愛し人を愛する「宗教的な生活態度」は立派に育つのであります。

『総合 保育カリキュラム』——両親と先生のために——（一九五三年四月、草美社）

これはB6版二〇〇頁余りの本で、その内容は、「序文」「カリキュラムと目標」「自発性の原理」「カリキュラム試案」「毎月の保育案」（四月——三月）「健康保育の要訳」「附録・カリキュラム年表」の順に書かれています。

「カリキュラムと目標」の中で、教育基本法の精神を尊重してカリキュラムを作成しなければならないが、自分は「有神論」の上に立つと明言しています。それは、人間教育の原理が、どのような人生観や世界観の上に立っているか——「唯物論か、汎神論か、有神論か」——によって非常な差異が生ずるからであるとしています。

また、「性格教育」すなわち、強く（自律性）、やさしく（社会性）、聖く（宗教性）をしつけて、常識、友情、勇氣、想像、敬虔、ユーモアの豊かな人物にすることを強調しています。

現在では小学校低学年の教育と幼稚園の保育と全く一本筋につながったので、それを考慮に入れ、また、「季節」や「年中

行事」をもその中に入れて保育カリキュラムを作製すること、

また、民主主義的感覚で次第に発展するように作ること、従来の「教師中心主義」の保育が「幼児中心主義」の保育になるように計画して、自発性の原理に立って構成することが今後の保育カリキュラムの目標でなければならぬと主張しています。

「カリキュラム試案」には、高崎能樹先生が園長である阿佐ヶ谷幼稚園のそれが記されています。終戦後の子どもの特異性は、「心身ともに弱められている」ということで、その原因は「劣等感」に捕われているからであり、両親の生活の乱れが影響していることも多分にあるとして、「臨床心理」や「精神衛生」を保育に応用し、特に「宗教情操の教育」に力を入れなければならぬことを力説しています。

阿佐ヶ谷幼稚園の保育内容は、次の通りです。

一、個性本位の保育（生来の資質を調査してその長所を發揮させる）

二、健康増進の保育（保健衛生の習慣を身につけてやる）

三、生活向上の保育（左の五目標の達成に努める）

(1) 自律生活（元気で本気に、責任行動の出来る子どもにする）

(2) 社会生活（愛と和をもって、よく人と協力する子ども

にする）

(3) 宗教生活（神を見あげて、高く聖き憧れをもつ子どもにする）

(4) 科学生活（よく見る、よく聞く、よくする—特徴をもつ子どもにする）

(5) 芸術生活（美を感じ、美を表し得るセンスの豊かな子どもにする）

また、阿佐ヶ谷幼稚園は、幼児の保育だけでなく、「P・T・A」「母の学校」「母の会」等を通して、父母の教育に力を尽くしています。

「毎月の保育案」は、カリキュラムの目標と保育要項に則って詳しい指導が為されています。

「健康保育の要訣」は、「積極的健康増進法」と「病気の早期発見の秘訣」の二項に分けて記されていますが、前者においては、(1)日光、(2)空気、(3)食物、(4)運動、(5)睡眠、(6)衛生、(7)精神衛生の七つの点について、それぞれ子どもに身につける要点を具体的に指導しています。

附録の「保育カリキュラム年表」は、月次、組（年少組と年中組）、主題、単元、しつけ、国語、社会、理科、音楽、図画工作、保健体育、および備考から成っており、「しつけ」は「強

く「やさしく」「聖く」という観点から記されています。一目瞭然で、大変便利です。

『信・望・愛の教育』（一九五五年二月草美社）

この本には三一項に亘って述べられています。その中で特に気付いた点について記してみたいと思います。

「現今の教育の目あて」（一、二）の中では、広く深い常識、勇氣、想像、敬虔およびユーモアをもった人間が望ましいとされ、愛による理解、能動的教育の必要性が説かれています。

「母よ、母たれ」「母心は尊し」「母性を尊重せよ」「母に生くる道」等、母親としての在り方が強調されていますが、「母の教育の秘義」の中で、「懇切に論ぜ」と「同化に注意せよ」が説かれ、「母よ、笑顔であれ」が切に望まれ、笑顔は信仰と希望と愛との表現であるとされています。

『子どもの個性と癖』（一九五六年九月、草美社）

この本は、「個性本位の教育」「気質本位の指導要領」「子どもの癖の直し方」の三部から成っています。

「気質本位の指導要領」においては、多血質的傾向の子ども、胆汁質的傾向の子ども、粘液質的傾向の子ども、神経質的傾向の子どもと分けて、それぞれの特徴を挙げ、その指導法を、遊びによる指導などを織り交ぜて、具体的に懇切な指導がなされ

ています。

「子どもの癖の直し方」の個所には、勉強嫌いの子ども、喧嘩癖の子どもなど一三項に亘って記されています。その中で、「嘘つきの子ども」の中では、男の子どもは主として意志に基づく嘘をつくが、女の子どもは主として感情に基づく嘘をつきます。などと分析され、子どもの嘘は「愛と理解とで矯めよ」と指導しています。

*

*

以上、「その一」「その二」の二回に亘って、高崎能樹先生の生涯とその教育活動を跡づけて参りました。先生はキリスト教の新教（プロテスタントイズム）の牧師として召命を受けましたが、極めてユニークな牧師であったと申せましょう。

その第一は、教育（的）伝道の提唱者としての位置づけです。阿佐ヶ谷幼稚園を開設し、同時に日曜学校を開き、その両者結びつけ、日曜学校から教会に進み、その中から多くの者が洗礼を受けてキリスト教信徒となりました。教育伝道は成功したと言えらると思います。

第二は、キリスト教幼児教育（キリスト教保育）者として活

躍したということ。特に、母親教育に大きな足跡を残しました。すなわち、幼稚園に母の学校を設立して母親を指導し、雑誌『子供の教養』や単行本を通して母親に大きな感化を与えました。母の学校で育てられた母親方が教会と結びつき、受洗して教会員になった方も多くおります。

その人となりは、温顔で、真底子ども好きで、子どもから慕われ、子どもを心から愛しました。幼稚園の教諭にどうしてもなつかない幼児が、園長にはなついた実例もあります。

童話が上手で、その右に出る者は恐らくいなかったらうと述懐される幼稚園の先生もいます。

書き残された著書の紹介もして参りましたが、広い視野をもって幅広く筆を進めました。この外にも、首感教育や才能教育にも関心を寄せておりました。

神学的には、先生は自由主義神学の影響を受けていたと申せましょう。それは、先生の受けた神学教育と活躍された時代が、主として自由主義神学が主流をなしていた時代であったからだとも言えましょう。

自由主義神学というのは、シュライエルアッヘルからリツチェル、トレルチ、ハルナックという系列で受け継がれていった神学のことです。これは、ドイツ理想主義（あるいはドイツ観

念論）の影響を多分に受けた神学です。ドイツ理想主義は、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルと受け継がれていった哲学思想で、ヨーロッパの近代を前提として考えた場合、完璧な哲学体系です。それは、ヒューマニズム（人文主義）——人間中心主義——の思想で、プラトン等古代ギリシャ哲学とは、人間観、世界観、神観等において全く相反する対照的な思想です。従って自由主義神学は、キリスト教と人文主義の混淆で、聖書に記されている本来のキリスト教とは異なったものなのです。

現代神学の主流は、弁証法神学といわれるもので、カール・バルト、エミール・ブルンナー、パウル・ティリヒ達がその代表者で、自由主義神学が陥った人文主義的傾向を是正して、宗教改革者の精神に戻し、更に原始キリスト教の精神に還ろうとするものです。これが、聖書的に見てキリスト教本来の神学思想と言えるのです。

高崎能樹先生は、キリスト教教育思想家であったというより、極めて優れたキリスト教教育実践家であったと言えます。教育伝道の提唱者として、また、キリスト教保育者、特に母親教育者として、不滅の足跡を後世に先生は残されたと言えらると思えます。

||了||

（青山学院大学）